母よ　あなたは強かった！

一　逆転

昭和二十（一九四五）年、わたしは満七歳でした。

最後の国民学校の一年生です。

内地（日本）では、アメリカのB29爆撃機による空襲があり、戦争はますます激しくなってきました。しかし、ここ北朝鮮の㉜海州では、空襲もなく、毎日の食べ物にも不自由しませんでした。父は、この都市で、バス会社の専務の職についていました。

そのころ、わたしの家には掃海艇の乗組員や、戦闘機のパイロットたちが入れ代わり立ち代わり来て、わたしたち兄弟をとても可愛がってくれました。

戦場に飛び立つとき、わたしの家の上空を旋回し、翼をくり返しふりながら飛び去った姿を、今もはっきり覚えています。

「おばさんの家の上であいさつするから、きっと見ていてね」

と、母に約束したそうです。

まだ顔に幼さが残る彼らは、きっと母にあまえたかったのでしょう。

それが彼らの別れのあいさつになってしまったのです。

ほとんどの青年たちが戦死してしまいました。

八月十五日

日本は戦争に負けました。

父はバス会社の運営は公共の仕事であると言って、終戦をむかえても休むことは

しませんでした。市民の足をうばうことになるからです。

朝鮮人の社員たちも分かってくれて、平常運行ができました。

しかし、数日のうちに日本人の経営する会社は、次々と朝鮮人によって接収されました。

会社から日本人職員は追放され、警察も保安隊と名称を変えられて、朝鮮人が日本人を取りしまることになりました。

父は、保安隊に会社が接収されて交通の秩序が乱れるのを防ぐために、朝鮮人の重役たちに事業経営のすべてを引きつがせて、運営の権利をゆずりました。そして社員たちに退職金を支払いました。

父は、親しい将校から一刻も早く逃げるようにすすめられていましたが、そうした卑怯な行動はしませんでした。そのために、家族はつらい目にあわなくてはな

※掃海艇……敵が海中にしかけた機雷などの爆発物を取り除く船
※接収……権力を持つ人や機関が人々の所有物を強制的に取り上げること

らなかったけれども、わたしは実直で真面目で責任感の強い父をほこりに思っています。

二　母は教師だった！

突然、ソ連兵が数人どかどかと土足で我が家をおそってきました。

「金を出せ！」

と、すごみました。

父がお金を出すと、ひったくるようにして取り上げ、わめきますが、ソ連兵が何を言っているのか、わたしたちにはさっぱり分かりません。

そのうち、他の兵隊も入ってきて、父の両腕をつかみ、奥の部屋に引きずりこみました。

身の危険を感じた母は、赤ん坊をだきしめ、九歳、七歳、五歳の子供たちを自分の体にしがみつかせて大男をにらみつけました。男はいきなり母を拳銃でなぐり

つけましたが、母は、必死でわたしたちを守りぬいてくれました。その母の気迫におそれをなしたのか、うばえるだけうばって去っていきました。

しかし、ソ連兵の暴行は、やむことはありませんでした。

しばらくして、ソ連軍の※憲兵隊が進駐してきました。それと同時に、小高い丘の斜面一帯が、ソ連兵の墓地に早変わりしました。軍の規則に違反したとして、あの兵士たちが処刑されたという噂でした。

一応、憲兵によって治安は回復しましたが、まだ夜九時以降は外出禁止で、違反者は銃殺されるという物騒な状態でした。

父をたよって社員やその家族が集まってきました。二十人を超す大所帯となったので、とてもせまい社宅では入りきれず、父は大きな家を探して全員で引っ越しました。

そのころから母は、二学期になっても学校に行けない子供たちを集めて、自宅

※憲兵……軍隊で警察の役割をする軍人

教育を始めたのです。

日本に帰ったとき、一年おくれにならないようにと、母の教師魂がそうさせたのです。一年、二年、三年と学年もさまざまです。

複式学級だからそれは大変だったと思います。命さえ保障されない敗戦の混乱の中で、それでも子供たちの未来に希望を託して、懸命に指導してくれた母をわたしは尊敬します。

わたしたちは、きらきら瞳をかがやかせながら、未知の世界へと母に導かれていきました。

三　一回目の脱出

九月半ば過ぎごろから、ソ連軍より日本人会を通じて復員兵や成人男子に作業命令が出るようになりました。父もかり出されました。飛行場の草取り、ソ連軍住宅の便所のくみ取りなどでした。特に海州駅での、米や塩の袋をシベリアに向か

う貨車に積みこむ仕事には、くやしい思いをしました。このころ、物価は日ごとに値上がりして、日本人は食料に不自由し、※高粱のお粥などでしのいでいましたから、作業の労賃として支給される一日約五合の米はとてもありがたいものでした。

その間、「もうすぐ引揚げが始まる」「引揚げなどない」と噂が飛び交い、わたしたちは不安な日常を送っていました。

十一月半ばになっても、引揚げの通知はありませんでした。

食料事情もますます悪くなってきました。

そんなある日の朝、

「行ってくるよ」

と、元気に遠方の作業所に出かけた人たちが、帰ってこないという事件が起こりました。シベリアに送られてしまったのでした。

※復員……20ページの注を参照
※高粱……40ページの注を参照

無理やり作業にかりだされ、背後にはソ連軍の拳銃が待ち構えています。そして遠いシベリアに抑留されるかもしれない。そんな不安から、一刻も早く、正式な通達をあてにせずに脱出を図る人たちが次第に増えてきました。

そんな状況の中、一人の船頭が家にたずねてきました。

船頭は父の知人が託した一通の手紙を見せました。その知人は、以前に「早いうちに逃げだすつもりだが、無事脱出できたら、迎えの人をよこします」と言って別れた人でした。

手紙には、

「無事脱出できました。彼は信用できるから安心してください」

と書いてありました。船頭は、

「数日中に来ます。早く考えを決めておいてください」

と言い残して、帰っていきました。

やっと希望が見えてきました。

しかし、わたしたちの家族だけ密かに脱出するわけにはいきません。

今まで苦労を共にしてきた二十二人の人たちがいるのです。父と母はかつての社員のために、最後まで責任を果たそうとした父の生き方どおりに、全員で脱出することにしたのです。

父は船の出発場所の確認や安全、脱出情報の収集に全力を注ぎました。母は持っていく荷物の整理をしたり、万一のためにかくし持っていくお金を衣服に縫いこんだりしていました。

数日後の夜明け、約束どおり船頭が見えたとき、いっしょに脱出する予定の家族が待ち受けていました。船頭は、わたしたち家族だけの脱出だと思っていたので、おどろいて頭をかかえこんでしまいました。無理もありません。人数が多ければそれだけ見つかる可能性が高くなるのです。もし失敗したら自分の身にも危険がおよぶのです。みんなは必死でたのみこんで返事を待ちました。

※抑留……51ページの注を参照

「分かりました。やってみましょう」
との返事に、みんなは手を取り合って喜びました。

昭和二十年十二月十四日。脱出は決行されました。
それぞれの家族は目立たないように二つに分かれ、決して集団で行動しないようにと取り決めていたのですが、途中心細くなってひとかたまりになり、集落の前を通ったとき見つかってしまったのです。
他の家族がつかまったとき、
「主犯は小林という人で、自分たちはついてきただけだ」
と言ったそうです。
父や母は脱出をくわだてた責任者として、なぐられたり、けられたりしてどこかに連れていかれました。
わたしたち兄弟は両親から引きはなされ、心細さにふるえていました。

とらわれの身となったわたしたちは、うつむきながら、とぼとぼと暗い道を一時間も歩かされて保安署に着きました。

通された部屋は、真夜中だというのに赤々と電灯がつき、大勢の男たちがいました。父や母はそこにいました。ほっとしてうれしくて母に飛びつきたい気持ちでしたが、緊張したおそろしげな空気に、体が動きませんでした。

わたしたちは、冷たいコンクリートの上に座らされました。

「有り金全部はき出せ！　ぐずぐずするな！　さっさとしろ！　食料品は出さなくていい。持っていて出さない者は、見つかったらどんな目にあうか見せてやろうか！」

またもや父をなぐったり、けったりしました。わたしは自分がなぐられているようなこわさと痛さに、にぎりこぶしをにぎってたえました。

みんな、わなわなふるえながら、貴重品や現金を渡しました。

しかし、母は衣服の中に縫いこんだお金は断固かくし通しました。

男たちはしつこく全員、身体検査までしました。
幸い、母のかくしたお金は見つかりませんでした。
「女、子供たちには罪がない」
コンクリートの上に畳がしかれました。
寒さでふるえていたみんながほっとすると、
「責任者のお前は別だ」
と、父だけが奥の部屋に連れていかれてしまいました。
わたしは、父のことが心配で一晩中ねむれませんでした。

翌朝何時ごろだったでしょうか？
四十歳前後の男の人が来て、
「わたしは保安署長です。急いでとなりの部屋にある、大切なものだけ自分のリュックサックにつめて、持てるだけ持って海州に引き返してください。さっ、だ

れか来ないうちに早く！　わたしは見ないことにしますから。さあ、早く早く！」
まるで夢を見ているような気持ちです。地獄の中で仏に会ったような気持ちとはこのことか。言われるままに急いで荷物をまとめて出発しました。
しかし、父がどうなっているか分かりません。重い不安を背負って海州の町外れにたどり着きました。幸い母の友達がまだ脱出せずにいたので、その家にしばらく世話になることにしました。
しかし、父のことが心配でたまりません。
小学校三年の兄も同じ思いだったのでしょう。
「ぼくが保安署に行ってくる。お父さんがどうしているか見てくる」
と、けなげにも言ったのです。
母は、とても心配だったのですが、子供のほうがむしろ安全だと思い、おにぎりを持たせて往復六里の道を送りだしたのです。父を思う気持ちが兄に勇気と力をわき出させてくれたのでしょう。母は兄を送りだしてから、何度も何度も外の方を見

つめていました。
兄は無事に意気揚々と帰ってきました。
『何しに来た?』と言われたから『お父さんに会わせてください』って、言ったら、『こんなちびなのによく来たな』と言って、お父さんの所に連れていってくれたよ。お父さん元気だったけれど、毛布と着替えが欲しいって言ってたよ」
「よく、まあ、よく」
母は兄が無事に帰ってきたうれしさと、夫の無事が確認できたことの安堵で、言葉も出ないようでした。
翌日、兄はまた、大きなリュックを背負って海岸の保安署に向かったのです。わたしたちの居場所も父に知らせてあるので、不安をかかえながらも父を待つことにしました。

十日ほどたったある日の夕暮れ、突然父が帰ってきました。髪もひげもぼうぼうで別人のようでした。

「みんな、無事で良かった！」

父はそう一言、言っただけでした。

その一言に家族を思う父の気持ちがつまっていて、わたしは胸がいっぱいになりました。

父は言いました。

「お父さんの連れていかれた場所は、保安署長室だった。署長は『小林さん、わたしはあなたがこの国のためにずいぶん協力してくださったことに感謝しています。できればみなさんを無事、日本に帰してあげたい。しかし、現実はソ連軍の支配下にあり、部下の多くは日本人に反感を持っているので、見つけたらつかまえないわけにはいかないのです。今度逃げるときはどうかもっとうまくやってください』と言われ、晩ご飯には玉子丼を出してくれたよ」

たとえ国がちがっても、海州のために懸命に働いてきた父のことを認めてくれる人がいたということは、本当に幸運でした。

数日後、わたしたちは空き家になっている家を見つけて引っ越しました。釜、食器、衣類までそっくり置いてありました。生活するのには何の不自由もありませんでした。その後、父は何度も日本人会に出かけていき、引揚げに関することや、生活の足しになる仕事の手配や、海州に残っている人たちなどのさまざまな情報を聞いてきました。

脱走した人たちが発疹チフスにかかり、世話をした人まで感染して多くの死者が出た、同胞の脱走をソ連軍に密告する日本人もいたなど、父はさまざまな情報を仕入れ、家族が無事に帰国できるように心をくだいてくれました。

母は衣服に縫いこんでかくし通したお金を少しずつ使い、家族の健康を懸命に守ってくれました。

朝鮮の冬は寒さを増し、昭和二十一年をむかえました。コンクリート敷きの庭

は、夜、水をまいておくと朝はかちかちに凍っています。わたしたち兄弟は、スケートの歯のような金具をつけた箱そりを父に作ってもらって、その上をすべって遊びました。どんなに苦しいことがあっても子供は遊びの天才です。みんな苦しいことやつらいことをきゃっきゃっはしゃいではき出します。それが明日への原動力となっていったのです。そして元気な子供たちのはしゃぐ声は、どんなに大人たちのはげましとなったことでしょう。

四　二回目の脱出

ある日、父の知人のOさんがたずねてきました。Oさんはこの港の保安署長とも知り合いで、彼からのメッセージを届けてくれました。

「小林さんのことは気にかけていた。わたしの手配でご家族を国境まで送り届けるつもりですが、一家族一万円かかります。高いと思われるかも分かりませんが、集落の責任者を全部買収するのに必要なのです」と、いうことでした。

一万円といえば、持っているお金のほとんどです。
この寒い冬に脱出すれば、途中で凍え死んでしまうかも分かりません。そこで出発は三月と決めて、それまでの食費を確保するために、母は持っている着物を売って工面しました。

昭和二十一年三月九日。
保安署長の段取りにしたがって、わたしたちは暗闇の中を待ち合わせ場所の朝鮮人の家へと急ぎました。母の背中に赤ん坊、みんなの背中にはリュックサック、肩にはかばん、手に持てるだけの荷物を下げて、人目につかないように明かりをさけてしのぶように歩きました。
船にさえ乗ってしまえば安心です。でも見つかれば、また前と同じことになってしまいます。
東の空が明るくなるころ、目的の家にたどり着くと大勢の人が集まっていました。

そこで夜まで待って船に乗る予定でしたが、手配した船があやしまれて乗れなくなってしまいました。そこで、予定を変更して牛車で国境を越えることになりました。

またもやとんだハプニングでした。

暗くなるのを待って、牛車の待つ海岸に出発しました。

大股でどんどん歩く大人たちに追いつくために、わたしたち子供はまるで小走りマラソンです。息を切らして必死で大人たちについていくうちに、ふとふり向くと、父も母もいないことに気がつきました。母は赤ちゃんを背負い、父は五歳の弟の手を引いているからきっとおくれてしまったのでしょう。海岸に着いて荷物を積みこみ、出発というときになっても両親の姿は見えません。心配するわたしたちを案内人は、

「きっと後からくるから大丈夫だ」

と、はげましてくれました。荷物といっしょに牛車に乗せられて国境に向かいま

した。途中、何度も何度もふり返って、暗闇の道に目をこらしたけれど、父と母の姿は見えません。そのうち、いつの間にかつかれてねむってしまったようです。

明け方近く、山の中の集落の朝鮮人の家で、真っ白いご飯の食事をいただきました。

ご飯のおいしかったことを今もわたしは忘れません。朝鮮人の人たちの温かな心と共に。

そして、とうとう南北国境の三十八度線を越えたのです！

越えたといっても、草だらけの中の一本の白い線をまたいだといった感じでした。

南朝鮮の㉝青丹は、どこか明るくスマートな感じのアメリカ兵のいる町でした。

それから引揚者でぎゅうぎゅうにつまった貨物列車に乗せられ、㉞開城を通過して日本への窓口の⑫釜山に着きました。

そこで駅前の収容所に入れられました。

次々と列車で運ばれてくる引揚者の、乗船手続きが始まっています。
親にはぐれたわたしたち兄弟を親切に面倒を見てくださったXさんも、いよいよ乗船です。
「わたしたちは先に船に乗って内地に帰るけれど、君たちはここでお父さんたちを待ちなさい！　ここにいればきっと会えるから大丈夫だよ」
と、わたしたちをはげまして船に乗ってしまいました。
わたしたちは知らない人たちの中でどんなに心細かったか、毎日毎日、列車が駅に着くたびに両親をさがしました。
わたしは、あの日の感動は一生忘れません。
体がだるくて収容所の片隅で横になってぼんやりしていたとき、兄が大声でさけびながら飛びこんできました。
「正明！　来たぞ！　お父さんもお母さんもみんな今、着いたぞ！」
兄の後ろに父と母、そして幼い弟がいたのです。

その瞬間のわたしの気持ちを表現することができません。

今までの心細さがいっぺんに吹っ飛んで、心の中は喜びに満ちあふれていたのです。

「お母さん！」

と言ったきり、涙が流れて止まりませんでした。

母は赤ちゃんを、父は幼い弟を連れての逃避行。さまざまなトラブルに出あいおくれてしまったようです。

三月十六日[35]博多に到着。しかし、天然痘患者と思われる人が発見され、上陸許可がおりない。一日一個のおにぎり。過酷な条件の中でも、家族がいっしょだから乗り越えることができたと思います。

三月二十七日。

やっとわたしたちは日本の土をふむことができたのです。

焼け野原の博多のバラック小屋では、そら豆が勢いよく天をあおぎ、うすむらさ

きの花を咲かせていました。

内地はもう春でした。

この労苦については、母の書『わが子よ、これが祖国の大地だ』と、わたしの記憶を元にまとめました。

（原作　小林正明「母よ！　あなたは強かった！」）